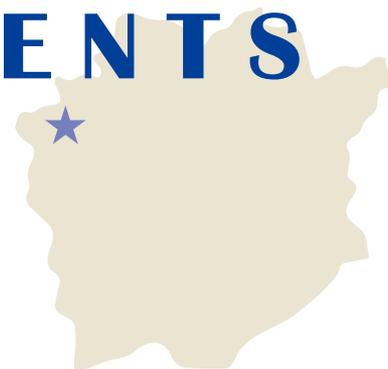


「地域生活支援拠点等の整備等に関する実態調査」
各自治体等の概要版

岡山県 新見市

目次

CONTENTS



2

| **01** | 新見市の概要

3

| **02** | 地域生活支援拠点等の整備プロセス、整備類型、概要

4

| **03** | 各機能の具体的な内容

6

| **04** | 地域生活支援拠点等のイメージ図

7

| **05** | 地域生活支援拠点等における支援の事例

8

| **06** | 地域生活支援拠点等の整備・運営における今後の課題・方針

- 人口 30,417人（平成29年7月末現在）
- 障害者の状況（平成29年3月末現在）
 - ・障害者数 2,023人
 - ・身体障害者手帳所持者 1,666人
 - ・療育手帳所持者 230人
 - ・精神障害者保健福祉手帳所持者 127人
 - ・地域の高齢化が進み、障害者も高齢化
（65歳以上では40%を超え、75歳以上でも30%以上）
 - ・障害者の8割が身体障害、それ以外は知的障害と精神障害が1割ずつ
 - ・高齢障害者の一人暮らし、または同居者が高齢の家族のみで、介護や見守りに限界がきている障害者が年々増加
- 新見市の位置



02 地域生活支援拠点等の整備プロセス、整備類型、概要

整備のプロセス

- 新見市（旧哲多町）には、知的障害者授産施設と支援学校が併設された岡山県健康の森学園（小・中・高校）があり、障害者への理解が高い地域
- 当事者、家族、支援者から精神障害者の受け入れ施設の整備等の要望書を受け、平成14年3月から検討を開始
- 平成18年10月に新見市障害者地域活動支援センター「ほほえみ広場にいみ」として開所、開所から約11年間のノウハウの積み重ねによって、現在の、地域との連携体制や事業所からの派遣などの仕組みを構築

整備類型

面的整備型

（開所当初から地域生活支援拠点等の役割を担っていた「ほほえみ広場にいみ」が中心）

概要

- 「ほほえみ広場にいみ」は誰でも利用できるワンストップの相談窓口
- 同一建物内にさまざまな事業所が入っており日常的に連携、緊急時には迅速に対応できるようにしており、「ほほえみ広場にいみ」を拠点に適切な支援につなげていく連携体制を構築
- 緊急時には併設型（医療型含む）の短期入所で対応、相談支援専門員とも連携
- 自立支援協議会の事務局として、関係機関との連携を構築
- 事前情報として警察とも連携し、緊急時に迅速に対応

相談

- 「ほほえみ広場にいみ」の受付は、日曜から金曜までの9時から18時
- 夜間と土曜は市役所の宿直で対応。緊急性が高いものは「ほほえみ広場にいみ」に連絡が入り（誰かには必ずつながる）そこから適切な場所につなぐ
- 日曜は地域のサロンの役割も果たしている
- 「ほほえみ広場にいみ」から必要なところにつなぐ流れができており、実質上は、基幹相談支援センターのような役割も担っている
- 「まずは『ほほえみ広場にいみ』に相談」という空気が醸成されており、ワンストップ窓口として機能
- 建物内に多数の事業所が入居し、日常的に連携を行うことで、緊急時には速やかな対応ができる

緊急時の受け入れ

- 事前に、短期入所可能な施設に緊急時の受け入れを交渉
- 短期入所は障害者支援施設である大佐荘、健康の森学園、神郷の園の3か所と、新見中央病院に医療型があり、各施設とも3床ある
- 各施設から派遣された職員もあり、緊急時のスムーズな対応に繋がっている
- 警察とも連携しており、迅速に病院につなぐ体制を確保

体験の機会、 場

- グループホーム体験の相談や希望があれば、情報提供、関係機関との連絡調整を行い、居住や就労などの体験の機会や場につなぐ
- グループホームは、健康の森学園に10か所、神郷の園に2か所、福祉ワークセンターに女性向けが1か所で計13か所
- 管理者に理解のある民間の賃貸住宅があり、一人暮らし希望者は体験を通さずにそこで一人暮らしを始めるケースがある
- 「ほほえみ広場にいみ」では入居後も家庭訪問し、トラブルのサポートも行う

専門的人材 の確保・養成

- 「ほほえみ広場にいみ」のスタッフは、県主催の研修会に参加（虐待防止、権利擁護、発達障害者支援、相談支援専門員の研修など）

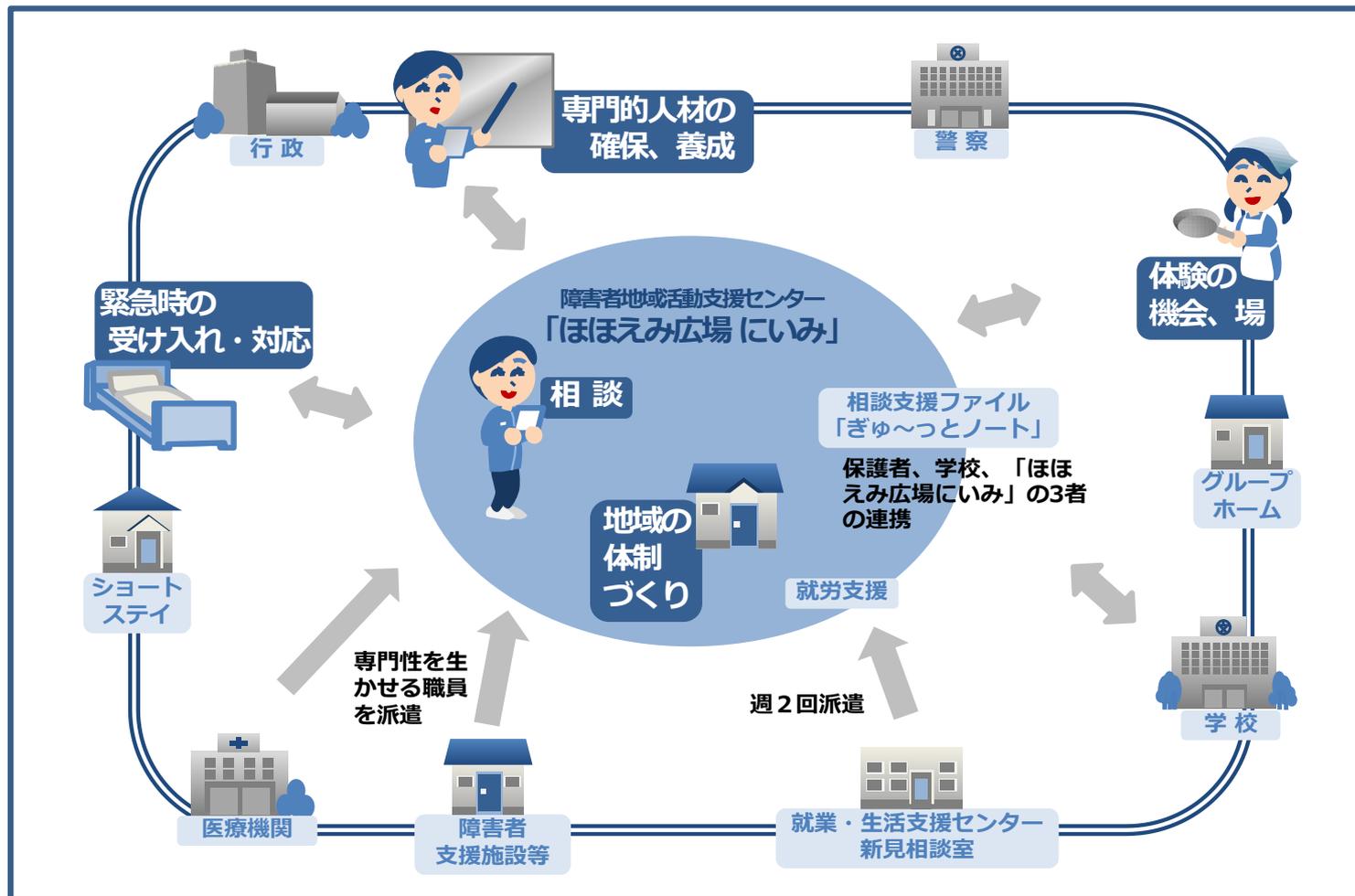
地域の体制 づくり

- 地域自立支援協議会（「ほほえみ広場にいみ」が事務局）の全体会の他、各部会の会議を頻繁に開催し、各関係機関との連携を構築
- 相談支援ファイルの活用により、保護者、学校、「ほほえみ広場にいみ」が連携
- 各事業所から「ほほえみ広場にいみ」に出向し地域連携を強化
- 「ほほえみ広場にいみ」を開放し、当事者の憩いの場や地域の拠点としている

その他

- 介護施設への移行期の人には、相談支援専門員が介護施設と調整
- 強度行動障害は南部にある専門機関、高次脳機能障害は本人の希望に沿った福祉サービス、医療的ケアが必要な重度障害は医療型の短期入所等につなげる

- 「ほほえみ広場にいみ」を中心とした面的整備
- 「ほほえみ広場にいみ」は、障害福祉サービスを使っていない人も含めて誰でも利用できるワンストップの相談窓口として機能



利用事例

1

利用者の属性

- ・40代男性
- ・自宅で独居。両親は他界しており、きょうだいも独立している

利用した経緯

- ・20年間、自宅に引きこもり。5年前に父が、3年前に母も他界
- ・その後、両親が残してくれた貯金が底をつき、平成28年3月に相談を受ける
- ・併設している地域活動支援センターⅢ型から利用を開始。必要に応じて悩み等の相談を受ける

利用の効果等

- ・生活リズムを整えたり、相談によって不安を解消したりすることで、平成28年、新見市とハローワーク主催の障害者就職面接会にて、市内のスーパーマーケットへの就職が決まる。その後も、障害者就業・生活支援センターと協働で、定期訪問等の職場定着支援を行っている

● 増加傾向にある30～40代の発達障害者の対応方法

親の高齢化が進み、障害者や引きこもり等の家族を支えることが困難となってきた家庭が増えている。特に30代・40代の発達障害がベースにあると思われる人への支援が急激に増しており、その対応方法に課題を感じている

● 障害専門のヘルパーが不足

障害専門のヘルパーの数が少ない。事業所自体も運営が厳しいため、なかなか増えない。高齢者の介護ヘルパーは障害者への対応を敬遠する人もいるため、障害者のヘルプサービスへの理解を深める必要がある

● 就労に関する専門の人材の不足

就労継続支援 A 型事業所が少ない。「たかはし障害者就業・生活支援センター」は常駐ではないため、就労先の開拓、就労定着支援の機能が不足している